

日本語・日本事情教育部門

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 共通教育科目・日本語日本事情科目

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

2008年度、日本語研修コースでは、本学の大学院に進学する教員研修留学生2名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法10コマ（1コマ：90分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化の各技能クラスがある。さらに今年度からは修了発表指導を時間割の中に組み込んだ。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。修了発表における各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

< 8期 2008年度後期 >

教師の仕事－知識を次の世代へ	ギルバート・カーアラム・ガラガテ（フィリピン）
教育－成功へのドアを開けるかぎ	ミラグロス・ペロカル（ペルー）

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
3	日本語 (情報処理)	日本語 (作文)	日本語 (漢字)	日本語 (会話)	日本語 (修了発表指導)
4			日本語 (文化)		

以下に、各クラスの概要をまとめる。なお、2008年度、日本語研修特別コースは開講されなかった。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】2名（非漢字系2名） 【授業時間】10コマ/週 総コマ数：130コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

1) 目標

留学生生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第1～30課）

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 原則として2日（4コマ）で、1課を終了した。学習者の様子を見ながら、コーディネーターが2週間ごとに詳細なスケジュールを作成し、それに基づいて授業を進めた。

- ・ 『みんなの日本語初級』関連の聴解、問題集等の副教材を適宜使用した。後半は、留学生活に即したロールプレイを作成し会話練習を行った。独自に作成した語彙クイズ、短作文を継続して行い、語彙の定着を図った。

(2) 成績・評価

中間テスト (15%) と期末テスト (85%) で、最終成績 60 点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

3) 評価と課題

- ・ 学習態度は2名とも大変良好であった。学習者間に日本語力の差が見られたが、協力し合って非常によい雰囲気の中で学習を継続することができた。
- ・ 学習者の到達度を考慮し、当初 31 課まで進む予定であったが 30 課までとし、総合的な練習を行う時間を増やした。(桑原陽子)

《日本語 (情報処理)》

【受講者】 2名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】 桑原陽子

1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

2) 方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。日本語 (作文) との連携を深め、修了発表の準備を行った。修了発表資料を評価対象とした。

3) 評価と課題

日本語 (作文) と連携し、修了発表の準備をスムーズに行うことができた。(桑原陽子)

《日本語 (漢字)》

【受講者】 2名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】 山中和樹

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』を使って、ひらがな・カタカナ・漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～10の112漢字、170漢字語を習得する。

2) 方法

(1) 漢字導入

- ・ 原則として1コマ1ユニットで進んだ。ただし、最初の2コマ (2週目) で、ひらがなとカタカナの定着を図り、3コマ目から漢字の学習を始めた。
- ・ 授業では、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

(2) 復習クイズ

- ・ 毎回、当該ユニットの復習クイズを実施した。最初の2回は絵と漢字と意味 [英語] をつ

なぎ合わせる問題を出題した。それ以降は漢字の読みをひらがなで書く問題を出題した。

(2) 成績・評価

- ・ 毎回のクイズを総合して、評価した。1名はほとんど完璧だった。もう1名はやや劣ったが、良好な成績だった。2名とも、出席・授業態度ともに良好だった。

3) 評価と課題

- ・ 学生は2名とも非漢字圏出身だったので、漢字に興味を持たせるべく、随時、『漢字はむずかしくない』(アルク)より、絵から漢字への変遷の図解を利用したり、自ら絵を描いたりした。その結果、ねらいどおり、漢字に興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組むようになった。
- ・ 日常生活では漢字を書くことより、読むことのほうが重要なので、読みの練習のほうに力点を置いた。
- ・ 復習クイズにおいて、長音表記にいくらか誤表記が見られたが、これは長音習得の問題と思われる。(山中和樹)

《日本語(作文)》

【受講者】2名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ 【担当教員】今尾ゆき子

1) 教科書および授業の目標

- ・ ハンドアウト(単文作成問題、モデル文、関連語彙等)
- ・ 既習の文法項目や語彙・表現を使って、あるテーマについて文章が作成できることを目指す。修了発表レポートの作成を最終目標とする。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 授業の始めに、修了発表のテーマを大まかに決め(「私の仕事、私の学校、私の専門、私の学校の行事」、課題作文の集大成が修了発表および修了レポート作成の基盤となるように、7つの課題を設定した。
- ・ Q&A方式の単文作成とモデル文を参考に文章作成の練習を行い、課題作文はワープロ打ちで宿題とした。
- ・ 短文作成は授業中に添削、課題作文は添削後、口頭発表。
- ・ 12月末までに7つの課題作文をまとめて修了レポートを作成し、1月から個別指導。
(課題作文:1. 自己紹介 2. わたしのまいにち 3. わたしの学校 4. わたしの経歴・わたしの専門 5. 教師のしごと 6. 学校の行事 7. わたしの国・わたしの町)

(2) 成績・評価

課題作文(50%) + 修了レポート(50%)

3) 評価と課題

- ・ 出席は2名とも皆出席。授業態度はおおむね良好。
- ・ 文章作成に際して、ひらがな・カタカナのみを使用が目立ち、漢字クラスで習得したはず

の既習漢字を書こうとする姿勢が見られなかった。また、既習の文型・語彙についても同様に、新規に学習した項目を積極的に活用していないように見受けられた。

- ・ 文章作成は文型・文法、語彙（漢字）項目の集大成であり、各技能別科目の習得状況に関して密接な情報交換と連携が望まれる。 (今尾ゆき子)

《日本語（会話）》

【受講者】 2名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】 中島清

1) 目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、「みんなの日本語」の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

2) 授業方法

- ① 作文用テーマを15題提示し、毎週1テーマずつ作文を宿題として課す。
- ② 授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する。
- ③ その後、「みんなの日本語」各課5問の即答練習を行う。
- ④ 最後に、日本の歌を紹介するか、又は「新日本語の基礎」の復習ビデオを使って、より自然な会話を学ぶ。

3) 成績・評価

- ・ 成績評価割合 期末テスト100%（即答問題50%、テーマ発表50%）
出席率25% 作文提出率25%
- ・ 期末テスト内容
 - ① 即答問題：質問文25問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約10秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでQAともに収録・採点する。
 - ② テーマ発表：学期期間中に発表した12のテーマの内、各2テーマが記載してある6枚のカードを用意し、その中から抽選で1枚選んでもらい、カードに書いてある2つのテーマから1題を選び、そのテーマについて1分考えた後3分発表、2分質疑応答をして評価する。
- ・ 出席率、作文提出率は100%であり、授業態度の良好であった。

4) 評価・課題

- ・ 留学生センターの教室は狭く窮屈な雰囲気が否めないで、より開放的な雰囲気で会話ができるようラウンドテーブルがあり、かつ広々としたラウンジを教室として使ったが、それはよかった。
- ・ 2名とも人生経験豊富で、話題も多岐にわたり、毎日の発表も面白い内容であった。
- ・ 2名のみのクラスなので、費用対効果の点から、もったいない気がする。 (中島清)

《日本語（文化）》

【受講者】2名 【授業時間】1コマ/週 14コマ

【担当教員】膽吹覚（コーディネーター）、廣谷幸子（華道）、勝木禮子（書道）、堀川覚右衛門（俳画）、今藤長文喜（三味線）

1) 目標

華道、書道、俳画、三味線を、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

2) 授業内容

(ア) 華道（池坊福井中央支部）：5コマ

第1回は華道とその中の池坊について概説し、道具の使い方を説明したうえで、花に親しむことを目的として自由花に取り組んだ。第2回は秋の花をテーマに、自由花を生けた。第3回はクリスマスをテーマに自由花を生けた。第4回は正月の花というテーマで、生花正風体に取り組んだ。第5回は春の花というテーマで生花新風体を学んだ。いずれの回も出来上がった作品をセンター1階に展示し、また、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。また、3月7・8日、福井県国際交流開館で開かれた池坊福井中央支部華展に学校華道として、2名の作品を出品した。

(イ) 書道（若越書道会）：3コマ

第1回は授業のはじめに筆の持ち方や運び方などの基本を指導し、その後、各自の名前をひらがなで書く練習をした。第2回はカタカナを書く練習をした。第3回は書初めをした。事前に受講生が漢字1字を選定し、それを色紙に書いた。

(ウ) 俳画：2コマ

第1回は俳画特有の筆の運び方や絵の具の使い方を学び、その後、課題として「紫式部」を描く。手本は講師よりいただいたものを複写し、各自に配布した。第2回は来年の干支である「丑」を描いた。出来上がった作品は簡易な掛け軸に入れて教室に展示した。

(エ) 三味線（今藤流）：4コマ

第1回は講師による三味線の実演にはじまり、三味線の持ち方、音の出し方を練習した。第2回から第3回は「さくら」の演奏を練習した。楽譜は今藤長文喜氏が外国人向きにアレンジし、それに膽吹が意見を加えて、本コースオリジナルの楽譜を作成。第4回は発表会とし、講師を含めた5名による合奏と受講生一人ひとりの独奏をビデオに撮影した。

3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組み、初心者とは思えぬ作品を仕上げる人もいた。講師もこれまでの経験を活かし、指導もより丁寧になったように思う。次年度は、華道はインターネット華展への出品を予定している。また、俳画に代わって陶芸を開講する予定である。これによって、受講生が自ら作った器に花を生ける（名札も受講生が書く）という総合芸術が可能となる。（膽吹覚）

《コース全体についての課題》

受講生が2名しかおらずきめ細かな指導ができたことは、非常に良かった点である。その一方で、留学生センター全体のコース運営を考えると、他のコースに比べて贅沢という印象はぬぐえない。学習者の側から考えても、もう少しクラスの人数が多いほうが多彩な活動ができ、学習効果が上がったのではないだろうか。この点は、コース開始当初、短期留学プログラムや全学日本語コースとの合同授業の可能性も探したが、対応が遅れたため、進度の不一致や担当教員などの問題が解決できず断念した経緯がある。本コースの受講生の受け入れ人数について留学生センターが関与することはできないが、可能な限りコース開始以前の早い時期に受講学生数を把握することによって、適切な対応がとれるようにしたい。

(桑原陽子)

2. 短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情10単位、伝統産業2単位が必修となっている。2008年度(後期)受け入れから中・上級レベルの学生にも対応できるように日本語科目および日本事情科目を増設した。

<2008年度新設科目>

1. 日本語上級(前期・後期)
2. 多文化コミュニケーション1(後期)
3. 多文化コミュニケーション2(前期)
4. 応用日本語1(後期)
5. 応用日本語2(前期)
6. 日本の文化(前期)

2008年度前期の受講者は2007年度に受け入れた進級生のみで、「日本語初級」は不開講、「伝統産業2」は全員が「伝統産業1」(2007年後期)を履修したため受講者はゼロであった。2008年度後期は初級から上級まで多様なレベルの新規学生18名が本コースを受講した。

① 2008年前期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初中級1	桑原陽子 村上洋子 敷田紀子 澤崎幸江	『みんなの日本語初級Ⅱ』	7名
日本語初中級2	膽吹覚 村上洋子 敷田紀子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4名
日本語中級	山中和樹 膽吹覚	『日本語中級J301』	5名
日本事情2	山中和樹	プリント	2名
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字 英語版』	5名
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	8名
はじめての会話	中島清	『みんなの日本語初級Ⅰ』 『みんなの日本語初級Ⅱ』	11名
伝統産業2	中島清	プリント	0名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情 2			
2限	初中級 2	初中級 2	初中級 2		初中級 2
3限	日本語中級	日本語中級	日本語中級	日本語中級	
		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	
4限	日本語初中級 1	日本語初中級 1	日本語初中級 1		初中級 1

《受講者数》

科目	国名 国	中	U	マ	イ	フ	イン	バン	合
		国	S	レ	ラ	ラン	ド	グ	計
		A	ー	ン	ス	ネ	ラ		
			シ			シ	デ		
			ア			ア	シ		
							ユ		
日本語初中級 1		3	0	0	1	1	1	1	7
日本語初中級 2		3	0	1	0	0	0	0	4
日本語中級		2	3	0	0	0	0	0	5
日本事情 2		1	3	0	0	0	0	0	4
はじめての漢字		0	0	1	1	1	1	1	5
はじめての作文		5	0	1	1	0	1	0	8
はじめての会話		6	0	1	1	1	1	1	11
伝統産業 2		0	0	0	0	0	0	0	0
小計		20	6	4	4	3	4	3	44

《授業報告》

1. 日本語初中級

- ・ 受講生：7名（漢字圏3名、非漢字圏4名 中国3、インドネシア1、バングラデシュ1、イラン1、フランス1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：58コマ
- ・ 担当教員：*桑原陽子、澤崎幸江、敷田紀子、村上洋子（*コーディネーター）

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26課～46課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

- ・ 2日で1課終了。適宜、副教材「書いて覚える文型練習帳」「聴解タスク25」等を使用する。会話ビデオは可能であれば使用した。各課末の「練習」は宿題とした。
- ・ 各課の新出語彙から10語選択し、短作文問題を作成。宿題とした。
- ・ 文法復習の時間を合計9回、応用練習活動を2回設け、適宜復習や練習を行った。

(2) 教科書以外の活動：スピーチ

毎日一人ずつ短いスピーチを行った。学生が自分でテーマを決める自由スピーチや、くじによってスピーチ直前にテーマを与えるくじスピーチなどを適宜行った。

(3) 成績評価

- ・ 文法復習テスト（筆記）3回（15%分）＋修了テスト（85%分）

3) 評価

- ・ 全員授業態度は良好であった。
- ・ 当初は、48課まで進む予定だったが、6月半ばに学生と話し合った結果、46課までとした。進度が遅い分、復習に時間をかけて学生の負担を減らした。
- ・ コース終了時のアンケートに、もっと会話練習の機会が欲しかったという希望が多かった。ロールプレイなど様々な活動を積極的に取り入れるべきであった。ただし、取り入れる活動の決定には、学生のニーズも十分考慮が必要である。
- ・ 2回目のテスト範囲が広く学生の負担が大きかったので、次回は2回目を31-36課とし、3回目を37-43課とする。
- ・ 短作文は、毎回配布するのは負担で、添削の管理が難しいので、コース最初に冊子にして学生に渡すほうがよい。（桑原陽子）

2. 日本語初中級2

- ・ 受講者：4名（中国3名、マレーシア1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 56コマ
- ・ 担当教員：* 臆吹覚、村上洋子、敷田紀子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）29課～50課まで
『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳文法解説』（同上）
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をすることによって、日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

1課を2日のペースで進めた。第1日目は語彙の導入、練習Aの前半とそれに該当する練習B・Cを、第2日目は練習Aの後半とそれに該当する練習B・C、会話（ビデオを含む）を行

った。また、必要に応じて『書いて覚える文型練習帳』、『聴解タスク』から教材を選出し、使用した。宿題は第1日目に短文作成プリントを、第2日目には問題のプリントを配布し、それぞれ翌日に回収し、添削して返却した。また、毎日、1人が3分程度の日本語スピーチを担当し、その後、その他の生徒と発表者がそのスピーチに関して日本語で質疑応答する時間を設けた。

(2) 復習クイズ

29～33 課、34～38 課、39～43 課、44～50 課、の4回に分けて小テストを実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで4度実施した小テストを20%、期末試験を80%で換算し、その合計によって評価した。

(4) 評価と課題

このクラスは受講生の日本語の学習意欲が高く、又、その習得もスムーズであったので、ほぼシラバスどおり授業を進めることができた。導入した文型・語彙は、期末試験を見る限り、ほぼ習得できたと判断してよいであろう。なかでもスピーチは受講生が主体的に取り組み、日本語の発音、会話的表現といった語学レベルはいうまでもなく、スピーチの構成、説得力などのプレゼンテーションにおいても、教員の予想を超える優秀なスピーチができたことは特筆すべきであろう。これは受講生の総合的な学力が高かったことによるものと思われる。(膽吹覚)

3. 日本語中級

- ・ 受講者5名(米国3名、中国2名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：55コマ
- ・ 担当教員：*山中和樹、膽吹覚(*コーディネーター)

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)、『中級へ行こう』(スリーエーネットワーク)
- ・ 初級300時間終了程度の人を対象に、中級段階への橋渡しを目的とする。

2) 方法

(1) 授業方法

週4コマのうち1コマをインタビューの授業にあて、残りの3コマで教科書に沿った授業を行った。

インタビューについては、3回で1セットとし、1回目のインタビューの準備、2回目で実際にインタビューを行い、それをビデオに撮り、3回目でビデオを見て、問題点を整理した。

教科書の授業については、初中級段階で『みんなの日本語初級Ⅱ』の47課～50課までが未習だったので、1課を2コマのペースで授業を行った。

『中級へ行こう』の方は3コマで1課を終えるペースで行った。具体的には、まず本文に入る前に「話しましょう」という項目があり、本文に関する話題について話し合った。次に本

文のCDを聞き、「新しいことば」の導入を行い、本文を読み、本文の内容を確認した。それから、「ことばの練習」、QAに進み、「新しい文型と表現」の解説をし、「新しい表現の練習」も行った。練習問題には基本練習と応用練習があり、短作文は毎回提出課題とした。最後にまとめとして聴解タスクシートでCDを聞き、空所にことばを埋めた。

このほかに、本文の導入部に「のだろうか」がよく使われていることから、「のである文」についてのプリントを配布し、練習問題も行った。また、連用中止とテ形についてのプリントや「は」と「が」の使い分けのプリントも配布し、随時、練習問題も行った。

(2) 評価方法

インタビューについては1セットごとに評価を行った(合計5回)。『みんなの日本語初級Ⅱ』終了時点と『中級へ行こう』の第5課終了時点及び第10課終了時点でテストを行った。配布したプリントの項目もテストに加えた。

インタビューの配点は25点、教科書の方は75点、合計100点にした。

3) 評価と課題

5名中2名が4コマのうち、1コマを他の授業に出席しており、出席率が規定の3分の2以上を満たすかどうか危ぶまれる学生もいたが、何とかクリアした。他の学生の出席状況は良好であった。

日本語能力が突出している学生が1名いたので、その学生にとっては教科書は易しかったようで、もの足りないかと思っただが、いい復習になったとの感想を得た。

学生全体の授業態度も非常によかった。

教科書についてはもう少し歯ごたえのあるものがよかったかと思う。(山中和樹)

4. 日本事情2

受講者：4名(米国3名、中国1名)

- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリントを配布(DVD及びCD使用)
- ・ 日本人にとっては誰でも知っているようなことでも、外国人には未知のことが多くある。基本的な日本地理や歴史、その他愛唱歌等も紹介し、日本に対する理解を深める。

2) 方法

(1) 授業方法

この科目は共通教育科目「日本事情A」との合同授業である。授業のはじめにDVD「美しき日本の歌」より原則として、それぞれ2曲ずつ紹介した。また、CD「日本民謡大全集」より福井県の民謡を3曲紹介した。

歌詞及びDVDの画面についても適宜、解説した。

この他の学習内容は次のとおり。

1. 日本の地理
2. 日本の歴史
3. 日本の国旗・国歌
4. 日本の祝日
5. 年中行事

(2) 復習クイズ

旧国名と各地方の名産品等を結びつけたり、歴史上の有名な人物の肖像画とその人物名を結びつけたりする問題を出題した。ただし、あまりできていなくても減点はしていない。よく覚えてきた学生には加点。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえでレポート、授業態度、復習クイズの結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育科目との合同授業であったが、受講した学生の日本語能力は学部学生の日本語能力に劣るものではなかった。

歴史教材として、プリント（特にビジュアル的なもの）を多く配布し、歴史が身近に感じられるように配慮した。

同時に受講している学部学生の中には入学前に日本の地理や歴史を学んでいる者もいる一方、あまり知識のない学生もいた。内容が易しすぎないように、まだ難しすぎないように配慮したつもりではあるが、不十分だったかもしれない。

学部学生との合同授業である以上、今後ともこのようなことは大いにあり得ると思われる。

(山中和樹)

5. はじめての漢字

- ・ 受講者：5名（インドネシア、バングラディッシュ、マレーシア、フランス、イラン 各1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級 I 漢字 英語版』
- ・ 漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～10の112漢字、170漢字語を習得。

2) 方法

(1) 漢字導入

原則として1コマ1ユニットで進んだ。最初の1コマ（1週目）で、ひらがなとカタカナの定着度を確認した後、漢字の成り立ちと基本的な筆順を導入した。2コマ目から漢字を導入し、第3コマ目からディクテーションを実施した。次回学習項目の予習プリントを配付し、授業ではテキストの練習問題、クイズ、ディクテーションを行うことにより、漢字の定着を図った。

(2) 復習クイズ

毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みクイズと書きクイズ）とテキスト巻末のクイズを実施した。学生が提出した答案は、その場で採点して誤答を指摘し学生に修正させる方法をとった。

(3) 成績・評価

出席(10%)、クイズ3種(10%)、中間(40%)・期末テスト(40%)とし、総合的に判断した。

3) 評価と課題

参加学生は5名全員が非漢字圏で、異形の文字である漢字に強い関心を示し、熱心に漢字学習に取り組んだ。習得状況もきわめて良好で、学習漢字以外の漢字に関する質問が毎回続出した。全員、出席・態度、成績ともに優秀。毎回のクイズは80～100%の出来。期末試験の成績は95点～100点であった。問題点は漢字の読み(表記)で、長音表記(①語中長音欠落：^{にじゅうはち}二十八 ②語中長音添加：^{きょうねん}去年 ③語末長音欠落：^{ぎんこ}銀行)に誤答が目立った。(今尾ゆき子)

6. はじめての作文

- ・ 受講者：8名(中国5名、マレーシア1名、インドネシア1名、イラン1名)
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級 やさしい作文』を使って、基本的な文型、表現や作文のきそらしきを学び、実際に作文練習を行った。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級 やさしい作文』の取扱い

- ・ 原則として、1コマ1ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので1コマ2ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましよう」(実際の作文)からなっている。文法が不確かな場合は、随時文法解説も行った。実際の作文が時間内に終わらない場合は、宿題とした。

(2) 作文推敲

- ・ 従来、学習者が作成した作文を翌週の授業で推敲させていたが、人数が多いので、今回はできなかった。担当者は学習者からの質問に応じたり、アドバイスを与えたりした。その後、担当者が添削し、多くの学習者に共通する(または、しそうな)間違いを全員に提示し、適切な表現を全員で考えさせた。どうしても学習者から適切な表現が出てこない場合は、担当者が例を示した。

(3) 成績評価

- ・ 課題作文提出回数と出席状況・授業態度より総合的に評価した。

3) 評価と課題

- ・ 出席・授業態度ともおおむね良好であったが、やや不十分な学習者もいた。
- ・ 1名レベルの高い学習者がいて、授業の前に当該ユニットの作文を書いてきていた。この学習者にはこの授業はややもの足りないものであったと思われる。(山中和樹)

7. はじめての会話

- ・ 受講者：11名(中国6名、フランス、イラン、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア各1名)
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：13コマ
- ・ 担当教員：中島清

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』
- ・ 目標：指導教員との会話、学外活動での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

2) 方法

教科書にない言葉も使いながら、いろんな表現が出来るように練習する。具体的には、1. 毎週あるテーマについて作文を課し、その作文をベースに発表させ、その後他の学生が発表内容について質問をする、2. 各課質問への即答練習、の2点が主たる作業である。その他に、「新日本語の基礎Ⅰ」及び「新日本語の基礎Ⅱ」の復習ビデオ教材を使い、自然な場面での日本語表現を習得する。日本の歌も5曲紹介・練習した。毎週課す作文は添削して、評価・返却した。

3) 評価と課題

最終試験、毎週提出の作文、出席率を総合的に点数化して評価する。最終試験は①20問の口頭即答試験(各問10秒以内に答える)②あるテーマについての発表と質疑応答試験(3つのテーマをその場で与え、その中の一つのテーマについて1分考えた後3分発表する)を実施・評価した。出席率、作文の提出率、授業態度等全般にほぼ完璧で、最終試験も良好であり、初期の目標を達成できた。課題としては、①受講者が多いため、発表の時間が十分取れないこと、②話題が広範囲に及ぶ場合、他の学生が興味を持ってないことがあるなどがある。(中島清)

8. 伝統産業2

「伝統産業」については、「伝統産業1」(秋開講)か「伝統産業2」(春開講)のどちらかを履修することになっているが、全員が「伝統産業1」を履修したため、「伝統産業2」の履修者はいなかった。(中島清)

② 2008年後期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級A	今尾ゆき子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	7名
日本語初級B	山中和樹 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	6名
日本語初中級	膽吹覚 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	1名
日本語中級(B)	膽吹覚	『日本語ライティング』/プリント	3名
日本語中級(D)	山中和樹	プリント	3名
日本語上級(F)	今尾ゆき子	『日本語能力試験1級対策問題集』	1名
日本語上級(H)	桑原陽子	プリント	1名
日本事情1	今尾ゆき子	『日本を知る』	4名
多文化コミュニケーション1	山中和樹	プリント	4名
応用日本語1	中島清		0名
伝統産業1	中島清	プリント	18名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限	応用日本語1			多文化コミュ1	
2限		日本事情1			
	日本語初級A	日本語初級A	日本語初級A	日本語初級A	
3限	日本語初級B	日本語初級B	日本語初級B	日本語初級B	伝統産業1
	日本語初中級	日本語初中級 日本語中級(D) 日本語上級(H)	日本語初中級	日本語初中級	
4限		日本語中級(B) 日本語上級(F)			

《受講者数》

科目 \ 国名	中 国	韓 国	タ イ	ド イ ツ	ポー ランド	シ リ ア	合 計
日本語 初級A	4	1	0	0	1	1	7
日本語初級B	4	1	1	0	0	0	6
日本語初中級	1	0	0	0	0	0	1
日本語中級	1	0	0	2	0	0	3
日本語上級	1	0	0	0	0	0	1
日本事情 1	2	0	0	2	0	0	4
多文化コミュニケーション 1	2	0	0	2	0	0	4
応用日本語 1	0	0	0	0	0	0	0
伝統産業 1	11	2	1	2	1	1	18
小計	26	4	2	8	2	2	44

《授業》

1. 日本語初級A

- ・ 受講者：7名（漢字圏4名、非漢字圏3名、中国4、韓国1、シリア1、ポーランド1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：52コマ
- ・ 担当教員：*今尾ゆき子、村上洋子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級 I』25 課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 原則として2課を4コマで行った。1課を1コマで導入。3コマ目に2課分の談話練習と運用練習を行い、4コマ目に復習の時間を設けて定着を図った。
- ・ 「会話」は復習の時間に12回（1, 5, 6, 8, 9, 13, 15, 17, 18, 20, 22, 24 課）実施。
会話運用力をつけるために、毎回1人ずつ日付、曜日、天気の様子と週末の出来事のスピーチを実施。
- ・ 聴解問題はテープを貸し出して宿題とした。

- ・ 「かな」は、「ひらがな」を4回、「カタカナ」を2回で導入（各コマ 10 分程度）。ひらがなテスト1（清音）、ひらがなテスト2（濁音・拗音・長音・撥音・促音）とカタカナテストを実施。
- ・ かなの導入（5課終了）後、談話練習と復習の時間に10分程度「語彙クイズとディクテーション」を行った。語彙クイズ6問とディクテーション4問で、5課から25課まで21回実施。

(2) 復習テスト

5課ごとの復習テストを5回実施。

(3) 成績および評価

復習テスト5回（15%）と期末テスト（85%）の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 授業開始前における「ひらがな」の習得状況は、7名中5名が既習、2名が50%前後。2週間（7コマ）のかな文字導入期間で全員が「ひらがな」を習得し、文型導入に支障がなくなった。しかし、カタカナの習得は学期末時点においても不完全で、引き続き「カタカナ」の定着を図る必要がある。
- ・ 学期後半、非漢字圏の学生2名（1名は足のけがで入院）が重要な文法項目導入日に欠席する事態が数回生じた。適宜、補習を（90分2回、60分1回 45分1回）実施して習得の遅れを取り戻し、成績評価は全員優（80%以上）となった。日本語科目10単位の取得は必須であることから、学生の習得が遅れた場合、補習は不可避となる。このような突発的事態における補習授業に対して謝金を確保する体制が望まれる。
(今尾ゆき子)

2. 日本語初級B

- ・ 受講者6名（中国4名、韓国1名、タイ1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：52コマ
- ・ 担当教員：*山中和樹、市村葉子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級I』（スリーエーネットワーク）25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 文型導入

- ・ 原則として2課を3コマで行った。1コマ目、2コマ目に各課を導入し、3コマ目に2課分の談話練習、運用練習等を行った。4コマ目で2課分の会話練習と絵カードを使った語彙の定着を行った。テキストの会話の部分は4コマ目にビデオを利用して練習を行った。
- ・ 聴解問題はテープを貸し出して宿題とした。
- ・ テキストの復習A～E、練習プリント（『書いて覚える文型練習帳』他から作成）をほぼ毎

回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

(2) 復習テスト：5回実施（原則として5課ごとに1回）

(3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ 第1週目の3コマで、ひらがな導入。
- ・ 第2週目の3コマでカタカナ導入。

(4) ディクテーション

- ・ ひらがな・カタカナ及び語彙の定着を図るために、ひらがな・カタカナ導入後の第3週目（5課終了後）から開始。毎週2回実施し、総回数21回。
- ・ 問題は4問。復習を兼ねて各課（5課以降）の例文から4文抜粋。さらに、絵を見て答える語彙の問題を6問程度追加。5～8分で実施。

(5) 評価

- ・ 復習テスト5回（25%）＋期末テスト（75%）

3) 評価と課題

(1) 文型・語彙導入

- ・ 原則として、1コマで1課を導入するので、文法項目が多くて大変な課もあった。しかしながら、余裕を持って授業計画を立てていたため、特に問題はなかった。
- ・ 今回は学生がみな優秀で、能力差がほとんどなかったため、進めやすかった。

(2) 文字習得

- ・ 6名全員が既習であった。ただし、授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）の正答率90%以上は4名、残りの2名はそれぞれ、56%、25%であった。2週間の文字導入期間で正答率90%以下の学生2名も「かな」の読みができるようになり、文型導入に支障がなくなった。
- ・ 第3週から正確な表記のためのディクテーションが可能になり、語彙・表現・文型の復習が行えるようになった。
- ・ 長音（語中：^{しゅうみ}趣味、語末：電話番号・^{ばんご}勉強^{べんきょ}等）表記の不正確さが見られた。また、カタカナの定着が全般的に不完全で、カタカナ語（外来語）の表記はあまり満足できるレベルではなかった。引き続き、初中級でもディクテーションの実施が望まれる。

(3) 学生の出席率の成績

- ・ 出席は非常に良好。欠席0は3名、欠席1回は3名。
- ・ 授業態度、成績ともに優良。

(4) アンケート調査

- ・ 週4日ではなく、5日やってほしかったとの要望が1件あった。 (山中和樹)

3. 日本語初中級

- ・ 受講者：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 56コマ

- ・ 担当教員：* 膽吹覚、村上洋子（*コーディネーター）
- 1) 教科書及び授業の目標
 - ・ 教科書：『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）29課～50課まで
『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳文法解説』（同上）
 - ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をすることによって、日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。
 - 2) 方法
 - (1) 授業方法

1課を2日のペースで進めた。第1日目は語彙の導入、練習Aの前半とそれに該当する練習B・Cを、第2日目は練習Aの後半とそれに該当する練習B・Cを行った。また、必要に応じて『書いて覚える文型練習帳』から教材を選出し、使用した。さらに週に1コマは、スピーチと作文、会話（ビデオを含む）の授業にあてた。
 - (2) 復習クイズ

26～30課、31～35課、36～40課、41～45課、46～50課の5回に分けて小テストを実施した。
 - (3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで4度実施した小テストを20%、期末試験を80%で換算し、その合計によって評価した。
 - (4) 評価と課題

このクラスは受講生が1名であったので、受講生の進度に合わせてきめ細やかな指導ができたことは評価できるであろう。しかし、1名ゆえの弊害、たとえば他の留学生との日本語による会話練習ができなかったことや、他の留学生の誤用を通じて学習することができなかったこともまた留意しておかなければならないであろう。学生にとっても、また教師にとっても、できるならば、今後は1名のクラスは編成すべきではないと考えている。 (胆吹覚)

4. 日本語中級(日本語B)

- ・ 受講者：3名（ドイツ人2名、中国1名）
 - ・ 授業時間：1コマ/週 14コマ
 - ・ 担当教員：胆吹覚
- 1) 教科書及び授業の目標
 - ・ 教科書：『大学で学ぶための日本語ライティング』（アカデミック・ジャパニーズ）
 - ・ 授業の目標：留学生が大学生活で必要とされるアカデミックレベルの文章を書く技術を習得する。
 - 2) 授業方法

1回の授業で教科書に沿って1課ずつ進めた。授業では作文の前段階としていくつかの文型を導入し、その練習を行った。作文は教科書の課題に取り組んだ。学生が提出した作文は教員が添削し、次回の授業で返却し、誤用を修正・清書したものを再提させた。

3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで期末試験の結果に授業への取り組みなどを考慮して総合的に評価した。

4) 評価と課題

このクラスは学部の共通教育科目「日本語B」との合同クラスであった。学部の受講生は4名で、そのうち3名は講義開始当初にすでに中級レベル以上（日能試1級合格を含む）の日本語能力を有していたので、短期留学プログラム生との日本語能力に大きな開きがあった。この差は授業が終了するまで縮まることはなかったが、短期留学プログラム生も学部生に引け張られるように、作文能力が向上したように思う。その意味では合同クラスの効果があったといつてよいであろう。また、課題作文の再提出も3名すべてが欠かすことなく提出しており、受講生の真摯な態度が印象的であった。こうした学習態度が作文能力の向上に繋がったのではないだろうか。また、今回使用した教科書はシステムティックに構成されており、作文の教科書としては良好なものであった。

(膽吹堂)

5. 日本語中級(日本語D)

- ・ 受講者3名（ドイツ2名、中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『実践にほんごの作文』（凡人社）。ただし、絶版のため、必要部分のみハンドアウト配布。
- ・ 初級300時間終了程度の人を対象に、中級段階への橋渡しを目的とする。

2) 方法

(1) 授業方法

作文開始前に初級文法の接続、文体のまとめを復習。練習問題で定着を図る。「は」と「が」の使い分けの練習を終えた後で、学生の出身国の昔話を書かせ、それを全員で読んで、チェックする。このとき、語彙・文法・表現等の再確認を行う。

(2) 復習クイズ

「は」と「が」の使い分け、「～のである」文、連用中止とテ形接続の項目を学習後に、計3回復習クイズを行った。

(3) 評価方法

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、復習クイズの成績、課題提出状況などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

今期の学生は出席状況もよく、まじめであった。共通教育の日本語中級の授業と抱き合わせであったが、レベルの差もあまりなく、授業に支障はなかった。

アンケート結果に、「もっと多くの項目を扱って欲しかった」というのがあった。今後の課題としていきたい。
(山中和樹)

6. 日本語上級(日本語F)

- ・ 受講者：1名(漢字圏1名)
 - ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：今尾ゆき子
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 教科書：『日本語能力試験[1級]対策問題集』プリント(読解教材、補足練習問題等)
 - ・ 目標：日本語能力1級レベルの文法・語彙の習得と読解力を養い、大学の授業に必要な日本語能力を培う。1級試験合格を目標とし、合格者は得点を上げることを目指す。
- 2) 方法
- ・ 日本語能力[1級]対策問題集を使って問題を解く。適宜、読解プリントを使って速読練習を行う。
 - ・ 成績評価：中間試験(40%)、期末試験(50%)、出席点(10%)
- 3) 評価と課題
- ・ 出席・授業態度は良好。
 - ・ 今期から「日本語上級」は共通教育科目の「日本語F(上級)」と合同授業となった。当初、レベル差が大きく心配されたが、まじめに取り組み語彙力が向上した。
(今尾ゆき子)

7. 日本語上級(日本語H)

- ・ 受講者：1名(漢字圏1名)
 - ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：桑原陽子
- 1) 目標
- 新聞記事、新書等の生の日本語素材を読み、まとめる、討論するなど総合的に日本語力を伸ばすことを目標とする。素材は時事問題を取りあげそれに関連する語彙を学ぶ。
- 2) 方法
- (1) 新聞記事や新書の素材を読み、グループで議論して解答を導き出す。授業で扱った素材に関して、毎回要約、意見などのレポート課題を課す。
- (2) 評価
- インタビューテスト 25点×2回=50点
レポート 5点×13回=115点(提出は自由で、全部提出する必要はない。)
- 3) 評価
- ・ 授業態度は非常に良好で、課題レポートにもまじめに取り組んだ。課題は会話力を伸ばすことである。
(桑原陽子)

8. 日本事情 1

- ・ 受講者：4名（中国2名、ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 14コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教材：ハンドアウト（『日本を知るーその暮らし 365 日ー』から抜粋）、プリント
ビデオ：「年中行事としきたり」、NHK録画「ゆく年・くる年」など
- ・ 目標：日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ ハンドアウトやビデオで年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 福井市立郷土歴史博物館（特別展『江戸の暮らしと参勤交代』、参勤交代衣装の着付け体験）と福井県立歴史博物館の見学を通して福井の歴史、風土、産業について学んだ。
- ・ 俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同発表した。

(2) 成績及び評価

レポート（見学・ビデオの感想文、句作）：40%、期末レポート：50%、出席点：10%

3) 評価と課題

- ・ 出席および授業態度も良好で、特に見学授業や俳句の合同発表には楽しんで参加し、レポート作成も真面目に取り組んでいた。
- ・ 「日本事情1」は共通教育科目「日本事情B」との合同授業である。今回は「日本事情B」の受講生が12名と多く、総勢16名が参勤交代衣装の着付けを体験するのに振り袖や袴などの数が足りず、振り袖を着られなかった学生から不満が出た。時間的な制約もあり、受講者が10名以上の場合には何らかの対策が必要であろう。（今尾ゆき子）

9. 多文化コミュニケーション 1

- ・ 受講者：4名（中国2名、ドイツ2名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 目標

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

2) 方法

- (1) この科目は共通教育科目「多文化コミュニケーションA」との合同授業である。授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①氏名のつけかた、②学生出身国のあいさつ、及び指を使った数の数え方、③学生出身国の国旗・国歌の紹介、

④学生の出身国の年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥冠婚葬祭、墓、幽霊、お化け、であった。

(2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、③国旗・国歌の項目終了後、各国の国旗・国歌の比較対照のレポートを課した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、③国旗・国歌の中間レポートと、⑤伝統的な遊び、または⑥冠婚葬祭、墓、幽霊、お化けの期末レポートの評価、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育科目との共同授業であるので、学部学生の日本語能力との差が当初、懸念されたが、同等、又はそれ以上の能力があったので、杞憂に終わった。

今期に限ったことであるが、講義に使用される教室が、改築中の建物にあり、エレベーターが使用できず、CDラジカセ等の重いものを運搬するのが大変であった。パワーポイントの使用も考えていたが、運搬のことを考慮すると断念せざるを得なかった。そのかわりに、プリントを多数配布した。

資料として使うCDや、プリント類も拡充しており、少しずつではあるが、講義は進化しているものと思う。
(山中和樹)

10. 応用日本語 1

本科目の受講者はいなかった。

11. 伝統産業 1

- ・ 受講者：18名（中国11、韓国2、ドイツ2、シリア1、タイ1、ポーランド1）
- ・ 訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）
- ・ 担当教員：中島清

1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業中心である伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

2) 方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話聞く。更に、研修施設での実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

3) 評価と課題

成績評価割合：レポート提出率 50% 出席率 50%

- ・ 生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・ 従来、バス片道 1 時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006 年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。
- ・ 参加者 18 名というのは、騒音を伴う工場等での説明で、声が届きにくいという難点があるが、今回よりトランシーバーを全員に持たせることによって全員が均等に説明を聞けるようになった。

(中島清)

《むすび》

2008 年度前期は中国、USA、マレーシア、インドネシア、イラン、フランス、バングラデシュの 7 カ国、後期は中国、韓国、シリア、タイ、ドイツ、ポーランドの 6 カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2008 年度後期、新規に受け入れた 18 名は「日本語初級」(13 名)、「日本語初中級」(1 名)「日本語中級」(3 名)、日本語上級(1 名)をそれぞれ日本語力に応じて受講した。また、中級と上級の学生は「日本事情 1」と新設の「多文化コミュニケーション 1」を受講した。

本コースは、来日時初級レベルの学生を中心として組まれたカリキュラムであったが、近年、中～上級レベルの学生が増加してきたため、今期(2008 年度後期)から日本語・日本事情科目を増設した。今期は初級から上級まで多様なレベルの学生を受け入れたが、この新科目編成のもとで対応可能であることを確認できた。

(今尾ゆき子)

3. 全学向け日本語コース

《概要》

このコースは福井大学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象とした無料の日本語コース（補習コース）である。

1. 科目と時間割

《前期・後期共通》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ
2	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ
3	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	
4	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	

2. 継続受講学生の申し込みと新規受講学生（プレースメントテスト受験者）

《前期》

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
継続学生	登録可能学生数	5	16	9	15	42
	登録者数	1	14	9	12	36
	登録率（%）	20	88	100	80	86
新規学生（P T受験者数）		3	5	6	7	21
合 計		4	19	15	19	57

《後期》

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
継続学生	登録可能学生数	1	15	16	21	53
	登録者数	0	12	10	16	38
	登録率（%）	0	80	63	67	72
新規学生（P T受験者数）		14	4	0	0	18
合 計		14	16	10	14	56

3. 受講生の所属

《前期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
大学院生	3	12	10	15	40
研究生	1	1	2	1	5
学部生	0	0	3	0	3
短期留学生	0	2	0	2	4
外国人研究者	0	0	0	1	1
教員研究生	0	4	0	0	4
合計	4	19	15	19	57

《後期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
大学院生	8	7	8	12	35
研究生	6	5	0	0	11
学部生	0	0	0	0	0
短期留学生	0	0	1	1	2
外国人研究者	0	0	0	1	1
教員研究生	0	4	1	0	5
合計	14	16	10	14	54

4. 出席状況と合格率

《前期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
受講者数	4	19	15	19	57
出席率 60%～	3	11	5	5	24
合格者数	3	11	5	5	24
合格率	75	58	33	26	42

《後期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
受講者数	14	16	10	16	54
出席率 60%～	10	10	7	6	33
合格者数	6	7	6	6	25
合格率	43	44	60	38	46

5. 科目ごとの授業内容

《前期》

① 日本語Ⅰ

- ・ 受講者：4名（中国3名、台湾1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 64コマ
- ・ 担当教員：酢谷尚子、澤崎幸江、高瀬公子、* 敷田紀子
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語Ⅰ 文法解説書』『みんなの日本語初級Ⅱ』
(29課まで)『みんなの日本語Ⅱ 文法解説書』（いずれもスリーエーネットワーク）
- ・ 日本語の基本を理解し、簡単な日常のコミュニケーションができるようにする。

2) 方法

(1) 授業方法

いずれの学生も既習歴があったので、1課から10課まではほぼ1日1課のペースで進み、それ以降は1課に2日かけるペースで進んだ。数課ごとに動詞の形を中心にした復習を計3回、復習テストの前の復習日を3回設け、復習テストを3回実施した。さらに、運用力をつけるための活動を4回行った。また、期末試験前には復習日を3回設けた。復習には教科書に準拠する『聴解タスク』『初級で読めるトピック 25』『標準問題集』などを使用した。かなの導入は必要なかったが、各課の1日目には直前の課で学習した文型とカタカナ語のディクテーションを行い、表記上の癖や誤りの訂正も合わせて行った。

(2) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

今期の学生は1度も出席しなかった1名以外は出席率、授業態度ともに良く、学習項目の習得も大変スムーズで副教材も多用することができた上、学期当初の予定より、4課多く進み、学生の学習意欲に応えることができた。各課のディクテーションを行うことにより、正しい表記のしかたにも目を向けさせることができた。4技能の平均した向上が図られ、このレベルの学習目標は十分に達成できたが、常時出席するのが3名で、かつ同国人であり、うち2名が夫婦であった

こともあり、話す活動の一部はやりにくい面があった。しかし、学生の生活や研究の状況を考慮すると、話す練習にもっと力を入れるべきであったかと思う。(敷田紀子)

② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：19名（中国9名、フィリピン2名、シリア・モンゴル・韓国、タイ・コロンビア・ミャンマー・インドネシア・バングラディシュ各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 合計64コマ
- ・ 担当教員：澤崎幸江、酢谷尚子、*高瀬公子
- ・ コーディネーター：桑原陽子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26課から48課で、1課を2回のペースで進めた。各課は導入項目を2回に分け、1日に導入した部分の練習A～Cまで行なった。副教材は主に文型練習帳と聴解タスクを使った。2～3課毎に復習の日をもうけた。また、26～33課、34～41課、42～48課をひとまとめとして復習テストを行い、前日はテスト範囲の復習とした。

(2) 漢字学習

漢字学習は『みんなの日本語Ⅰ』の漢字テキストをもとに、漢字予定表を作り学習を進めた。フラッシュカードを使って、1日に5～6字読めるようにすることを目標に、復習テストの日とその前日を除く毎日行った、前回の反省で読めているようでも、主に長音や促音など、正しく表記できないことがあったので、2課毎に復習の日をもうけ、読み方のプリントを配布して書いてもらった。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テストともに10点程度の漢字の読みを出題した。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

3) 評価と課題

出席率を満たした14名は全員期末テストを受け、平均点は72.1点だった。優2名、良4名、可5名、不可3名だった。活発に質問し意欲的で学習目標を達成した学生がいる一方、まじめに出席するが学習項目の定着に困難が見られ、目標に到達しない学生がいて、残念だった。今回、漢字の読みプリントを実施したのは良かった。漢字圏と非漢字圏の学生間に漢字テストで不公平が見られたので、来期、漢字出題は漢字・非漢字圏で別問題にするなど工夫したい。(高瀬公子)

③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：12名
- ・ 授業時間：4コマ／週 52コマ
- ・ 担当教員：*澤崎幸江、村上洋子
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『Intermediate Japanese 中級の日本語』（ジャパントイムズ）第1～10課
- ・ 初級 300 時間終了程度の学習者を対象に、中級レベルの学生の聴解・会話・読解・作文の4技能の向上をはかる。

2) 方法

(1) 授業方法

1課をおよそ4コマで終えるペースで授業を進めた。まず、最初の3コマは、『みんなの日本語Ⅱ』の49、50課を使用して敬語の学習を行なった。それ以降は、各課3つの「会話」および「読み物」について、それぞれに該当する「単語」、「文法ノート」、「文法練習」を学習し、会話練習および読解練習を行った。読解また、適宜「運用練習」からロールプレイ、聴解、作文も取り入れた。漢字は、テキストの「書くのを覚える漢字」を読めるようになることを目的とし、「読めればよい漢字」は取り入れなかった。

(2) 復習クイズ

期間中3回復習クイズを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時指導を行った。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各10%、期末試験は70%に換算し、総合成績を判断した。

3) 評価と課題

今回の教科書で友だち同士のくだけた会話、先生との敬語を使った丁寧な会話など、さまざまな会話の形を学習したが、まだ状況に応じた会話がスムーズにできるようにはなっていない。今後も練習が必要であろう。また、各課30～50の漢字の読み方を学習したが、漢字圏の学生にも読めない漢字が多くあり、よい学習になったようである。ただ、非漢字圏の学生は一名だけで意欲的であったが、合計300以上の漢字の読み方を学習するのは負担が多すぎるという意見があった。漢字の取り扱いについては生徒の様子を見ながら数を減らすなど考慮が必要と考える。

(澤崎幸江)

④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：19名（中国19名）
- ・ 授業時間：4コマ／週 合計53コマ
- ・ 担当教員：村上洋子、高瀬公子、*酢谷尚子

- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『中級の日本語』（ジャパントイムズ）、『40日完成試験に出る読解』（桐原書店）
- ・ 中級レベル以上の人を対象に、4技能を並行的に伸ばすことを目標とする。

2) 方法

(1) 授業

範囲は『中級の日本語』11課から15課で、各課は会話①、会話②、会話③、読み物、作文・聞き取り、速読と分かれており、6、7日のペースで進めた。『40日完成試験に出る読解』は1日ごとに問題が分かれているので、テキストのとおり1日で1日分を進めた。

(2) 漢字学習・作文・活動他

漢字は『中級の日本語』をもとに漢字予定表を作り、授業のはじめにフラッシュカードを使って、1日に15字程度読めるようにすることを目標に行った。1課ごとに復習としてテキストの漢字リストに読み仮名を書かせ理解度をチェックした。『中級の日本語』のテーマに沿って1課ごとに400字程度の作文を書いた。今期中9回の活動を行い、その中で生教材として新聞やDVD、ビデオを用いて現実的な出来事や文化や習慣を語彙・文型とともに学んだ。今学期後半、日本語能力試験2級聴解過去問題を1日数問ずつ行った。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

出席率を満たした学生9名。そのうち期末試験を受けたのは5名で5名とも優。全員中国人だったが、母語が出ることは少なく、日本語で意見を交わし、熱心だった。作文では独創的な文章が書け、福井県の作文コンテストに参加する学生もおり、練習成果が出てよかった。活動での生教材は、学生にとっては新鮮でリアルタイムのことが学べて興味を持たせることができた。読解と聴解の能力試験問題によって、得意分野や苦手分野に気づかせることができ、能力向上のための意欲を増すことができた。今学期半ばから授業が大学の試験やレポート提出と重なり、授業に来られなくなる学生もおり残念だった。全学日本語Ⅳを前学期にすでに合格している学生は、出席率100%を満たしていても期末試験を受けておらず、今後は試験を受ける意味・重要性をわからせていかなければならないと思う。
(酢谷尚子)

《後期》

① 日本語Ⅰ

- ・ 受講者：14名（中国9名、パキスタン1名、タイ1名、バングラディッシュ1名、イギリス1名、インドネシア1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 60コマ
- ・ 担当教員：酢谷尚子、高瀬公子、*齋藤ますみ

- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 日本語で、簡単なコミュニケーションができるようにする。

2) 方法

(1) 授業方法

1 課をほぼ2回のペースで行い、総復習を含めた6回の復習の時間を設け、学習項目の定着を図った。途中3回の小テストも実施した。1回の進め方としてはその日に提出した文法項目を、提出した語彙を用い、基本練習から応用練習まで学生の理解度を考慮しながら行った。又『会話ビデオ』、『聴解タスク 25』（スリーエーネットワーク）なども活用し、なるべく自然な会話ができるようにした。

(2) かなについて

今回は、学生のほとんどが既習者であった。しかし全くの未習者が一人いたので、授業でも『Japanese KANA workbook』（福井大学留学生センター）を使用し、第2週目までにひらがなの読み書き全てを導入し、3週目にはカタカナを導入した。その後は単語単位、文単位のディクテーションを行った。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験(85%)、小テスト3回(15%)の結果を基に授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

登録者14名のうち11名が規定の出席率を満たしていたが、期末試験を受験したのは9名であった。試験を受験しなかった2名のうち、一人は試験日に一時帰国していた。もう一人はかなの習得に問題があった。前者は来期のプレイスメントテストを受験する予定である。学生は皆、積極的にクラス活動に参加し、協力的で和気あいあいとしたよいクラスであった。その反面、授業では終始口頭練習を重視したせいか、小テストを含む筆記テストの点数に結びつかない学生が何名かいたことは反省点である。今後はより学習項目の定着を図るために、今後も教員間の連絡を密にし、復習の時間をより充実したものにするよう努めたいと思う。(齋藤ますみ)

② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：16名（中国7名、フィリピン2名、UAE・韓国・コロンビア・タイ・ミャンマー・インドネシア・パングラディッシュ各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 合計60コマ
- ・ 担当教員：齋藤ますみ、酢谷尚子、*高瀬公子
- ・ コーディネーター：桑原陽子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）

- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26課から48課で、1課を2回のペースで進めた。各課は導入項目を2回に分け、1日に導入した部分の練習A～Cまで行なった。副教材は主に文型練習帳を使った。3課毎に復習の日をもうけた。また、26～33課、34～40課、41～48課をひとまとめとして復習テストを3回行い、前日はテスト範囲の復習をした。

(2) 漢字学習

漢字学習は『みんなの日本語Ⅰ』の漢字テキストをもとに、漢字予定表を作り学習を進めた。フラッシュカードを使って、1日に5～6字読めるようにすることを目標に、復習テストの日とその前日を除く毎日行った、読めているようでも、主に長音や促音など、正しく表記できないことがあるので、前期同様2課毎に復習の日をもうけ、読み方のプリントを配布して書いてもらった。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

3) 評価と課題

前半はほぼ毎日10人以上出席していたが、後半は7人前後になり、登録した16名のうち、7名は出席率を満たすことができなかった。出席率を満たした9名のうち7名が期末テストを受け、平均点は76点だった。優2名、良2名、可3名で全員合格だった。前期、漢字圏と非漢字圏の学生間に漢字テストで不公平が見られたので、今期、漢字問題は評価の対象外とした。漢字学習の意欲を維持するため、復習テスト・期末テストともに評価の枠外で出題した。漢字圏の学生には読み仮名を書かせ、非漢字圏の学生には4択形式としたところ、正答率にあまり違いが見られなくなった。話し合いの結果、漢字は来期も今期と同様に行うことになった。(高瀬公子)

③ 日本語Ⅲ

受講者：10名(中国6名、韓国1名、フランス1名、シリア1名、フィリピン1名)

- ・ 授業時間：4コマ/週 合計48コマ
- ・ 担当教員：齋藤ますみ、*酢谷尚子
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』
『新日本語の中級』『新日本語の中級分冊』(スリーエーネットワーク)
- ・ 初級300時間修了程度の学習者を対象に、中級レベルの聴解・会話・読解・作文の4技能の向上をはかる。

2) 方法

(1) 授業

1週目に『みんなの日本語Ⅱ』49課、50課で敬語を学習した。2週目から『新日本語の中級』1課～10課を、2日に1課のペースで進めた。1日目に語彙、文型、会話練習を行い、2日目に読解、活動（ロールプレイ等）、聴解を行った。復習テストは2回行い、テスト前日にテスト範囲を復習した。

(2) 漢字・読解・作文

漢字は『みんなの日本語Ⅱ』の漢字テキストをもとに、毎回フラッシュカードを使って、1日に8～9字読めるようにした。2課毎に復習として、漢字プリントを配布して読み方を書かせた。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テストともに10点の漢字の読みを出題した。読解は『みんなの日本語Ⅱ初級で読めるトピック25』を使って10回行い、速読し、そのトピックについて意見を交換できるようにした。作文は『初級からの日本語スピーチ』（凡人社）を使って5回行い、そのテーマで使う語彙・文型を確認し、意見を交換し、作文を書いた。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で復習テスト2回（20%）、期末試験（80%）の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

6名が出席率を満たしており、授業態度もよく、積極的にペアで会話練習やロールプレイをすることができた。多国籍だったので、互いに様々な意見が述べられ、よかった。漢字は非漢字圏の学生も熱心に覚えようとしていたが、全てを覚えるには負担が大きかったようで点数には繋がらなかった。作文は制限時間内に早くユーモアのあるものが書けてよかったが、発表としてスピーチまでする時間が持てなかったのが残念だった。読解は簡単だったようなので、今後は中級レベルに応じた読解テキストを選択しなければならないと思う。（酢谷尚子）

④ 日本語Ⅳ

受講者：16名（中国15名、韓国1名）

- ・ 授業時間：4コマ/週 合計48コマ
- ・ 担当教員：高瀬公子、*酢谷尚子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『日本語上級話者への道』（スリーエーネットワーク）
- ・ 上級レベルの人を対象に、上級レベルに相応しい会話能力をつけることを目標とする。

2) 方法

(1) 授業

・ 範囲は『日本語上級話者への道』1課から12課で、各課は導入（「始めよう」、「何をどんな順序で」）、STEP①（「どんなことばで」、「やってみよう」）、STEP②（「どんなことばで」、「や

ってみよう)と分かれており、1課を2日のペースで進めた。

1日目は導入とSTEP①までで、話す内容と順序についての意識化を図り、語彙・表現、文型の意味用法を確認し、実際にそれらを使って各課の話題について話し合ってみた。2日目はSTEP②で、さらに語彙・表現を増やし、状況を詳しく設定し、話し合い、発表できるようにした。

(2) 能力試験対策・活動他

週に2回「読解と聴解」の日を設け、能力試験1, 2級読解問題や『毎日の聞き取り中上級・上』(凡人社)を用いて読解練習や聴解練習をした。また、生教材として新聞やDVD、ビデオを用いて現実的な出来事や文化や習慣を語彙・文型とともに学んだ。12月の能力試験までは週に2, 3回、日本語能力試験2級聴解過去問題、2級文法問題、1, 2級読解問題を1日数問ずつ行った。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

出席率を満たした学生6名。そのうち期末試験を受けたのは5名で4名が優。1名が良。登録している4名は1度も出席せず、2名は1度しか出席しておらず、就職活動等で時間が取れず、授業に来られなくなる学生もおり残念だった。1名が韓国人で他は中国人だったが、話すべき内容と構成を意識しながら話題に応じた語彙や表現を使い、日本語で積極的に意見を交わすことができた。能力試験対策によって短期集中的に読解、聴解、文法のポイント・傾向を押さえ、練習し、解答テクニックを身に付けることができた。2級を受験した2名ともが合格。1級を受験した2名はかなりの点が取れたものの、惜しくも不合格だった。今後は1級合格を目指していけたらいいと思う。

(酢谷尚子)

4. 共通教育科目・日本語日本事情科目

《概要》

2008年度、センター教員はセンター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目8科目、並びに教養教育副専攻科目・日中言語文化系及び日本語日本文化系科目7科目、の計15科目を担当した。

<日本語A>

【受講生】8名（正規生8名）

【目標】初級文法の知識を確かなものにした上で、レポートや論文などが書けるようにする。

【教材】『実践にほんごの作文』（凡人社）。ただし、絶版のため、必要部分のみハンドアウト配布。

【方法】

- ・ 作文開始前に初級文法の接続、文体のまとめを復習。練習問題で定着を図る。「は」と「が」の使い分けの練習を終えた後で、学生の出身国の昔話を書かせ、それを全員で読んで、チェックする。このとき、語彙・文法・表現等の再確認を行う。
- ・ 連用中止とテ形接続、「は」と「が」の使い分けの項目学習後に中間試験、「～のである」文の項目を学習後に期末試験を行った。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、中間試験及び期末試験の成績、課題提出状況などを考慮して、総合的に判断した。
- ・ 中級クラスであるが、初級程度の学生や上級に近い学生もいて、まとまりが悪かった。まじめな学生がいる反面、授業態度のよくない学生も数名いた。これらの学生は課題提出状況も悪く、定期試験にもあまり準備してこなかったようである。そのため、単位を与えることはできなかった。

今後、このような学生が受講した場合、よりいっそうの厳しい対応が望まれる。（山中和樹）

<日本語B>

【受講生】4名（正規生2名、非正規生2名）

【目標】大学で求められるレポート・論文など、いわゆるアカデミックレベルの文章を書く技術の習得を目指す。

【教材】教科書：大学で学ぶための日本語ライティング

【方法】

- ・ 教科書に沿って、1コマ1課の進度で順に進めた。
- ・ 課ごとの作文を提出させ、それを教員が添削して指導した。

【評価と課題】

- ・ 少人数ゆえに決め細やかな指導ができた。

- ・ 中級レベルのクラスであったが、日能試1級合格者が半数を占めたために、本来の中級レベルの受講者へのケアが十分できなかった。
- ・ 評価は期末試験を基準に判定した。
- ・ 期末試験をみる限り、添削指導により受講生の書く技術は向上したといえるだろう。(膽吹覚)

<日本語C>

【受講生】11名（正規生10名、非正規生1名）

【目 標】文型、語彙を拡充し、適切な表現・語彙を使って与えられた映像について、より詳しい説明・描写ができるようになることを目指す。さらに学生生活上必要なメールの基本的な書き方を学ぶ。

【教 材】教科書は指定しない。授業中にハンドアウト等を配布する。

【方 法】

- ・ 教師が用意した15回分のVTR（1回数分）について、詳しく適切に描写する練習を行う。口頭での説明練習後、筆記による確認を行う。主としてペアワークによる活動を行う。
- ・ 授業5回ごとにテストを行い（計3回 配点は各30点）、それに平常点（10点満点）を加算する。

【評価と課題】

- ・ 授業態度は非常に良好で、活発な活動ができた。(桑原陽子)

<日本語D>

【受講生】9名（正規生6名、非正規生3名）

【目 標】初級文法の知識を確かなものにした上で、レポートや論文などが書けるようにする。

【教 材】『実践にほんごの作文』（凡人社）。ただし、絶版のため、必要部分のみハンドアウト配布。

【方 法】

- ・ 作文開始前に初級文法の接続、文体のまとめを復習。練習問題で定着を図る。「は」と「が」の使い分けの練習を終えた後で、学生の出身国の昔話を書かせ、それを全員で読んで、チェックする。このとき、語彙・文法・表現等の再確認を行う。
- ・ 「は」と「が」の使い分け、「～のである」文、連用中止とテ形接続の項目を学習後に合計3回復習テストを行った。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、中間試験及び期末試験の成績、課題提出状況などを考慮して、総合的に判断した。
- ・ 今期の学生は出席状況もよく、まじめであった。短期プログラムの日本語中級の授業と抱き合わせであったが、レベルの差もあまりなく、授業に支障はなかった。
アンケート結果に、「もっと多くの項目を扱って欲しかった」というのがあった。今後の課題としていきたい。(山中和樹)

<日本語E>

【受講生】13名（正規生4名、非正規生9名）

【目標】

- ・ 日本語能力1級レベルの文法・語彙習得と読解力を培い、大学の授業に必要な日本語能力を養う。
- ・ 日本語能力1級合格を目標とする。合格者は得点を上げることを目指す。

【教材】日本語能力[1級]対策問題集、プリント（読解教材、補足練習問題等）

【方法】

- ・ 日本語能力[1級]対策問題集を使って問題を解いていく。適宜、補足の練習問題を解いて定着を図る。また、読解プリントを使って速読練習を行う。
- ・ 中間試験（40%）、期末試験（50%）と出席点（10%）で、総合的に判断する。

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は殆ど全員が皆出席であった。
- ・ 受講者13名中5名（非正規生4名、正規生1名）が1級合格者で、1級未取得の8名を引張る形となった。その結果、全般的に日本語授業のレベルが高くなり、未取得者は1級合格レベルを目標に熱心に授業に取り組み、成績が著しく向上した。また、1級取得者もさらに高得点を目指せる実力がついた。（今尾ゆき子）

<日本語F>

【受講生】8名（学部生5名、交換留学生2名、日研生1名）

【目標】

- ・ 日本語能力1級レベルの文法・語彙習得と読解力を養い、大学の授業に必要な日本語能力を培う。日本語能力1級合格を目標とし、合格者は得点を上げることを目指す。

【教材】日本語能力[1級]対策問題集、プリント（読解教材、補足練習問題等）

【方法】

- ・ 日本語能力[1級]対策問題集を使って問題を解く。適宜、読解プリントを使って速読練習を行う。
- ・ 成績評価：中間試験（40%）、期末試験（50%）、出席点（10%）

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は良好（全員が90%以上の出席率）。
- ・ 学部生、交換留学生、日研生の他に今期から合同授業となった短期プログラム生が加わり、所属・日本語力ともに多様で活発な授業となった。日本語レベルが高く、成績は全般的に良好であった。一方で、穴埋めや選択問題においては単語・語句の使用が正確であっても、文章・談話における文の産出に不適切な場合が観察された。今後の課題としたい。（今尾ゆき子）

<日本語G>

【受講生】13名（正規生9名 非正規生4名）

【目標】上級レベルの作文で求められる副詞の用法について学ぶことで、よりの確な日本語表現を身に付ける。

【教材】教員がオリジナルのハンドアウトを配布した。

【方法】

- ・ 毎回、テーマ（用法）ごとに5～7個の副詞を取り上げて、その用法を解説し、その後、それを用いた短作文を書く。
- ・ 授業ごとに短作文を提出させ、それを教員が添削して指導した。

【評価と課題】

- ・ 期末試験をみる限り、添削指導により受講生の書く技術は向上したといえるだろう。
- ・ 副詞用法とアカデミックレベルの文章との関係をもう少し掘り下げたかったが、十分に消化できなかった。
- ・ 期末試験を基準に評価した。 (膽吹覚)

<日本語H>

【受講生】12名（正規生6名、非正規生6名）

【目標】新聞記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。また、レポート等に使われる表現を学び、適切な表現を使用してレポートを書く。

【教材】新聞記事等の生教材

【方法】

- ・ 新聞記事・新書を素材として使用しピアリーディングによる読解を行った。読解記事の要約、意見文執筆等のレポート課題を課し、書く訓練を行った。
- ・ レポート課題（各5点 自由提出・最大13個）と2回分のインタビューテスト（各25点）の得点を加算して評価する。

【評価と課題】

- ・ 授業態度は大変良好であった。
- ・ 日本語力の高い学生が多かったため、負担が大きく要求の高い課題を出した。日本語力の高い学生はよく課題をこなしていたが、比較的日本語力の低い学生（正規生に多い）の日本語力を伸ばすのが難しかった。上級クラスの照準をどこに合わせるかの判断が非常に難しいと感じている。 (桑原陽子)

<日本事情A>

【受講生】19名（学部生10名、交換留学生3名、短プロ生5、日研生1名）

【目標】日本の地理や歴史、宗教・文化、愛唱歌などを紹介し、日本に対する理解を深める。

【教材】ハンドアウト、DVD「美しき日本の歌」、CD「日本民謡大全集」

【方 法】

- ・ 授業のはじめにDVD「美しき日本の歌」より原則として、それぞれ2曲ずつ紹介した。また、CD「日本民謡大全集」より福井県の民謡を3曲紹介した。
歌詞及びDVDの画面についても適宜、解説した。
- ・ 地理・歴史を学習後、復習クイズを実施した。
旧国名と各地方の名産品等を結びつけたり、歴史上の有名な人物の肖像画とその人物名を結びつけたりする問題を出题した。ただし、あまりできていなくても減点はしていない。よく覚えてきた学生には加点。
- ・ 成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえでレポート、授業態度、復習クイズの結果をもとに総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 歴史教材として、プリント（特にビジュアル的なもの）を多く配布し、歴史が身近に感じられるように配慮した。
- ・ 同時に受講している学部学生の中には入学前に日本の地理や歴史を学んでいる者もいる一方、あまり知識のない学生もいた。内容が易しすぎないように、また難しすぎないように配慮したつもりではあるが、不十分だったかもしれない。（山中和樹）

<日本事情B>

【受講生】12名（学部生7名、交換留学生4名、日研生1名）

【目 標】日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教 材】ハンドアウト（『日本を知るーその暮らし365日ー』から抜粋）、プリント
ビデオ：「年中行事としきたり」、NHK録画「ゆく年・くる年」など

【方 法】

- ・ ハンドアウトやビデオで年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 福井市立郷土歴史博物館（特別展『江戸の暮らしと参勤交代』、参勤交代衣装の着付け体験）と福井県立歴史博物館の見学を行い福井の歴史、風土、産業について学んだ。
- ・ 俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同評価した。
- ・ 成績及び評価
レポート（見学・ビデオの感想文、句作）：40%、期末レポート：50%、出席点：10%

【評価と課題】

- ・ 今期は「日本事情1」の受講者4名を合わせて16名と多数であったことから、福井市立郷土歴史博物館の見学授業には大学のバスを利用した。また、博物館学芸員印牧信明氏からの好意的な申し出により、博物館の入場料（1人500円）が無料となった。本学宇野教授の博物館実習生が特別展に参加していたことによる。

これ迄は受講者が少人数であったため、入場料金は学生から徴収せず担当教員が負担してい

たが、受講者数が増加した場合、バスの手配も含めて検討する必要がある。

学生の授業態度は熱心で、特に見学授業や俳句の発表など参加型の授業を楽しんだ。

しかし、授業中に作成した感想文や宿題として提出を課したレポートについては、配布資料やパンフレット類の写しが見られ、「自分で考えて書く」という姿勢に欠けるきらいがある。これは受講生の日本語力のみ起因するものとは考えにくく、今後の課題である。（今尾ゆき子）

<日本の文化>

【受講生】16名（学部生15名、交換留学生1名）

【目 標】芸術方面だけではなく、衣食住や宗教など、日本人の生活習慣・考え方についての理解を深める。

【教 材】ハンドアウト、DVD『日本誕生』

【方 法】

- ・ 講義のはじめに、日本の神話と記紀の時代に関するDVD『日本誕生』を随時、紹介。プリントを配布して、内容を解説し、自国との違いを議論する。
- ・ 成績及び評価
成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえでレポート、授業態度等をもとに総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 日本語能力は中級程度の学生が大半で、だいたいのは理解できていたようである。仏教や神道に関する用語は、なるべく、わかりやすい言葉で言い換えた。DVD『日本誕生』は創世神話以外の部分（日本武尊の東征）はわかりにくかったようである。当然、解説はしたが、事前にもっと語彙について教えておくべきであった。
- ・ 以上のように改善すべき点もあったが、学生の反応もよく、一定の成果を上げられたものと思われる。（山中和樹）

<多文化コミュニケーションA・異文化コミュニケーションA>

【受講者】35名（日本人学生19名、留学生16名）

【目 標】

- ・ 日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教 材】プリント、CD「世界の国歌」、CD「君が代のすべて」、中国将棋

【方 法】

- ・ 授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①氏名のつけかた、②学生の出身国のあいさつ、及び指を使った数の数え方、③学生の出身国の国旗・国歌の紹介、④学生の出身国の年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥冠婚葬祭、墓、幽霊、お化け、である。

・ 評価と課題

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、③国旗・国歌の中間レポートと、⑤伝統的な遊び、または⑥冠婚葬祭、墓、幽霊、お化けの期末レポートの評価、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

【評価と課題】

- ・ 今期に限ったことであるが、講義に使用される教室が、改築中の建物にあり、エレベーターが使用できず、CDラジカセ等の重いものを運搬するのが大変であった。パワーポイントの使用も考えていたが、運搬のことを考慮すると断念せざるを得なかった。そのかわりに、プリントを多数配布した。
- ・ 資料として使うCDや、プリント類も拡充しており、少しずつではあるが、講義は進化しているものと思う。(山中和樹)

<多文化コミュニケーションB・日本語コミュニケーション>

【受講生】32名（日本人学生23名 留学生9名）

【目標】

- ・ 留学生と日本人学生とのグループディスカッションにより、情報交換・意見交換を通して相互理解を深める。

【教材】テキスト『外国人と一緒に生きる社会がやってきた』

【方法】

- ・ 日本在住の外国人に関する資料や、世界の国々の状況についてのビデオをもとに多言語・多民族社会における生き方を学ぶ。
- ・ 留学生1～2名を交えた5～6名のグループを作り、日本人学生と留学生が話し合うグループディスカッション（6回）を行い、「外国人という呼び方」「国際結婚」「外国語教育」などのテーマについて意見を交わす。
- ・ ワークシート（10点）、出席（10点）レポート（20点）レポート試験（50点）

【評価と課題】

- ・ 今年度は、日本人学生23名と留学生9名（マレーシア1名 インドネシア1名 中国7名）の合同授業で、留学生の出身国が3カ国と少なくしかも中国人留学生に偏っていた。
- ・ この授業で留学生と初めて話し合う機会を持った日本人学生も多く、グループディスカッションで留学生の意見や実態に触れることができたという感想が多かった。一方、今年度の留学生受講者は数が少ない上に、留学生（特に中国人留学生）の出席率が悪く、グループ編成に支障をきたした。活発な議論と相互理解を深めるために、留学生数が少なくとも全体の半数以上を占めることが望ましい。(今尾ゆき子)

<応用日本語Ⅰ>

【受講生】23名（正規生18名、非正規生5名）

【目標】日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養う、と共に語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方法】

導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法、短時間の速読により概略を把握する手法を交互に実施する。導入後は教材の講読、内容質問（学生による相互質問）等を行う。各回一つの記事を読みきり、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施する。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は期末試験、出席率、毎日の試験を総合評価して行うが、出席率もよく、授業態度も良好であった。
- ・ 資格外活動としてのアルバイトだけでなく、卒業後日本国内企業に就職する留学生の数が増えている。日本の企業文化、マナーを学ぶことにより、職場にスムーズに適応できるよう更に記事を厳選していく必要がある。（中島清）

<応用日本語Ⅱ>

【受講生】26名（正規生18名 非正規生8名）

【目標】最近の代表的な恋愛テレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教材】テレビドラマ「Beautiful Life」全11話（各45分）

【方法】まず、音なし画面を見て、その状況を相手に伝える作業を通し、状況把握力を養う。次に、音声付画面を見て、聴解の練習をする。最後に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容に関する試験を行う。そして、実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

【評価と課題】

- ・ 出席率、授業態度、毎日の試験、期末試験より総合的評価するが、出席率、授業態度ともに良好であり、所期の目標を達成することができた。（中島清）